

# ポジティブ思考で

# 自然の仕組み追求

第162回建築家フォーラムが東京都墨田区の大光電機面国ビルで開かれた。

建築家の鈴木エドワード氏（鈴木エドワード建築設計事務所代表）が「GOoD Design」と題して講演。卒業設計「空飛ぶ家」を手始めに、独立から40年の歩みを振り返るとともに、自ら「この世で最も優れた建築と確信している」と語る「GOoD Design」神の建築」である自然、宇宙の哲学なども紹介した。

鈴木氏は、1971年にノートルダム大卒業後、ハーバード大学院でアーバンデザイン建築学修士を取得した。バックミンスター・フラーやイサム・ノグチ、丹下健三に師事し、77年の独立以降は、アナキテチャー（アナキータチャー）をテーマに作品を発表。都心で住宅やビルの設計を手掛ける中、「眺めが見苦しかった」ことから、スクリーンとグリーン（緑）のコンビネーションで、周囲の景色と騒音を消すインターフェース（中間領域）を持つ建築に



## 鈴木エドワード氏 GOoD Design テーマに足跡振り返る

作風が変化していったという。

鈴木氏は「ある時期までインターフェースは自分が創り上げた概念だと考えていたが、縁側など無数の中間領域を持つ日本家屋に優れたデザインがキャブラリーが潜んでいた」と語る。そこからインターフェースを現代の縁側ととらえ、借景や月見台、坪庭、露天風呂など「日本の伝統的な暮らしの知恵を新しいデザインや素材、テクノロジーに置き換えて応用すること」をデザイン・ポリシーに据えて作品づくりを続けている。

インターフェースを用いた作品の中にも「昔のように借景できる環境や条件が少ない」ため、スクリーンなどで周囲を遮断する「デイベンシブなもの」がある一方、マサイ族が暮らすケニアのムパタ・ロッジでは、180度以上に広がる雄大な自然の景色を積極的に内側に取り込んでおり、さまざまなインターフェースを紹介して心地よさを追求している。

また、「建築に負けず自然の仕組みを追求する科学が好きだ」と語る鈴木氏は、「愛」というポジティブな思考がGOoD Design自然の仕組みを追求する原動力だと強調。「少しでも幸せを感じられる環境づくりにまい進したい」と、今後の展望を語った。

## フランク・ロイド・ライト生誕150年記念祝典

フランク・ロイド・ライト生誕150年記念事業委員会（堀静夫委員長）による「BOX PROJECT 2017」の一環として、ライト作品である東京都豊島区の自由学園明日館で記念祝典が開かれた一写真。「ライト建築と日本」をテーマに、パネルディスカッションでは宇都宮美術館主任学芸員の橋本優子氏がコーディネーターを務め、建築家の隈研吾氏、編集工学研究所所長の松岡正剛氏、兵庫県立大環境人間学科の水上市優准教授がライトと日本との関係性について活発に意見を交わした。

隈氏はライトの手法について「空間的なレイヤーを重ねて奥行きを生

どを挙げ、歌川広重の浮世絵から受けた影響を指摘。自身もそうした手法を意識しながら設計を手掛けたという栃木県那珂川町の馬頭広重美術館を紹介し、「建物のレイヤーを抜けて人工的な世界から奥にある山に行くような配置としており、私もラ

イト建築から大きな影響を受けている」と振り返った。

松岡氏は、「ライトが日本に残したものと、日本がライトにもたら



## 日本との関係性に焦点

### 歌川広重の浮世絵影響を指摘

が伝わった際にそれをアレンジして日本化してきた「エディティングフィルター」の観点から、「日本とライトについて再び振り返る必要が

おり、エディティングフィルターの存在を理解している。日本がもたらしたライトと、ライトがもたらした日本は食い違っていない」と評価した。

また、ライトの著書から、その建築思想を研究する水上氏は「帝国ホテルは1つの全体として首尾一貫したスタイルを持っており、諸様式には全く依存していない。試されているのは想像力であり、思い出ではない」というライトの言葉から「過去や現在の日本に見られる外見的な様式の引用が否定され、建築家の心の関与や歴史と風土への配慮、建物そのものの固有の独自性などが肯定的にとらえられている」と指摘した。

式典では、「ライト建築：『間』と動線空間」と題したイベント